

学際的研究について Concerning Interdisciplinary Research

平尾 収*

Osamu HIRAO

9月に行なわれた当学会第2回シンポジウムは、学際的な研究を身につけるためのトレーニングとしての数寄屋橋交差点の研究と、暴走族に関する研究の発表が議題であったが、傍聴していて、学際的という言葉の意味が会員のすべてに正しく理解されていないのではないかという印象を受けた。すなわち江守一郎君のいう多学的な段階に、まだとどまっているように思われた。

それは、会議の途中で「ある程度までやれば、それから先はそれぞれの専門家にまかせればよい」という発言が2、3の委員からあって、それが一応承認されたような形でシンポジウムが進められたので、そのように感じたのである。江守君もそのことを感じたのであろうと思う。彼は会議の途中で何度か、学際と多学とがいかにより異なり、また、多学を脱して学際の境地まで進むことがいかに重要であるかを力説していた。しかし、それは十分な理解に達しないまま流れてしまったように思う。現に私が、パネラーのひとりと数日後に会ったとき、学際的ということの意味が十分呑み込めないのだが、という質問を受けた。そこで筆者は、つぎのように説明した。

「参加するメンバー各自がそれぞれ、交差点問題あるいは暴走族問題の専門家になるのだという決意が、まず必要である。そのうえで、交差点問題あるいは暴走族問題の解明に必要なことはすべて、自分の専門の一分野なのだと考え、自分で積極的に勉強する態度が必要なのである。すなわち、人間行動なり心理なりに関することが必要となれば、それは交差点学なり暴走族学なりの一分野だと思って、自分でそれに取り組むことが必要なのである。

このときに、自分は機械工学の出身だから心理学の専門家にまかせようとか、自分は心理学の出身だから、車の流れや信号のコントロールの問題は交通工学の専門家に考えてもらおうと考えたのでは、それこそ多学的な集合になってしまうのである。機械工学出身者も心理学出身者も、法学出身者も経済学出身者も、それぞれが交差点学者あるいは暴走族学者になりきることである。交差点における人間心理や行動、交通の流れ、信号コントロール、道路構造、交通法規、交通経済など、必要なことはすべて自分たちの交差点学の専門に属することとして、とことんまで勉強して研究を進めるのでなければ、学際的境地は成立しない。このようになれば、結果としては今までなかった新しい専門分野が誕生するのである。それが交差点学であり暴走族学なのである」

要するに必要なことは、各自が今までの自分の専門にとらわれずに、いわば他人の専門分野にもどンドン踏み込んで、交差点学、暴走族学に関連するすべてのことについて、いわゆる専門家たちと対等な議論をたたかわせられるようになることである。そして、これはあなたの専門だからのむ、これは私の専門に属することだから私が引き受けるというようなことでは、多学的な状態から脱し得ないのだということである。

真に学際的な状態を創りだすまでには、各メンバーの継続的な努力と、年単位の時間を必要とするはずである。何よりも大切なことは、各メンバーがこのような努力の重要性を十分に理解することであろう。同じことが自動車工学についてもいえるのであって、エンジン学、車両力学、構造力学、タイヤ力学、人間工学等々の専門家が集まって協力するという状態から、関連するすべての研究者が人動車学の専門家になることが学際化の基本なのである。

* 東京大学生産技術研究所教授(自動車工学)